島根大学医学部附属病院広報誌

しろうさぎ

SHIROUSAGI

2023
71
January.1

TAKE FREE
ご自由にお持ち帰りください

Contents

特 集 Special issue

『良き医療人を育てる』
～臨床実習に必要なOSCE試験と模擬患者について～

●臨床実習・PCC-OSCE専門部会部会長　小児科教授・・・・・・・・・・・ 竹谷　健
●臨床実習前・後OSCEディレクター　クリニカルスキルアップセンター長・・・・ 狩野　賢二

- OSCE（客観的臨床能力試験）の目的と試験課題
- OSCEに欠かせない“模擬患者（SP）”について

表紙・特集 デザイン・イラスト／クリニカルスキルアップセンター　春日亜希子

＊Professor ～どんな先生?～
＊ボランティアさんのひとこと
＊私のここだけの話
＊病院紹介
＊イベントなどのお知らせ
＊しまだい病院のキラ☆めき!

島根大学
SHIMANE UNIVERSITY

病院長 年頭のご挨拶

島根大学医学部附属病院長
椎名（しいな） 浩昭（ひろあき）

あけましておめでとうございます。2020年3月にWHOがパンデミック宣言を行い既に3年あまりが経過いたしますが、いまだ収束の兆しが見えない日々のなか、皆様方も色々と大変であったと推察いたします。

当院は島根県の医療の「最後の砦」として、重症コロナ感染症患者とコロナ以外の重症患者さんの両者の受け入れを第一に診療を行ってまいりました。救える命を救うために、それぞれの病院の特性を理解したうえで、島根県の広域入院調整本部とともに近隣病院との密な連携を図り、病院職員の総力を挙げて協力いたしました。地域の拠点病院として病院機能を最大限に発揮し維持する観点から、面会制限など皆様にはご不便をおかけしましたが、お産や終末期など大切な節目に立ち会えるよう一部制限緩和するなど感染状況等に応じて柔軟に対応できる体制を構築いたしました。皆様方のご理解とご支援には改めまして深く感謝申し上げます。

さて、2022年は4月に脳卒中ケアユニット（SCU）を3床から6床に増床し、高度脳卒中センターの機能強化を行いました。一次脳卒中センター（PSC）コア施設にも認定され、より多くの方に質の高い高度な医療を提供できる体制を整えてまいりました。10月には2台目となる手術支援ロボット「ダビンチXi」を導入しました。ロボット支援手術の累計実施件数が1000件目を超えるとともに、肝胆膵外科領域でもロボット支援手術の導入を開始し、より安全な低侵襲手術のさらなる拡大に努めました。また、「都道府県がん診療連携拠点病院」としての重要な役割である緩和医療にも力を入れ、院内では緩和ケアセンターと緩和ケアチームの体制強化を行い、地域に向けては在宅緩和ケアとの連携によるシームレスな継続的医療の提供を図ってまいりました。

一方、高齢者のみならず、不妊治療や小児疾患に対する医療体制の整備も重要と考えております。今年度より保険収載された不妊治療に対してもより一層充実した生殖医療の提供に努めました。産科婦人科外来で在宅自己注射指導を開始し、通院回数を減らし通院に伴う仕事や家事への影響を抑えながら治療が可能になるなど、患者さんの負担軽減を図っています。また山陰で唯一、新生児の開心術が可能な小児心臓外科を有する拠点病院として、小児科と連携し先天性心疾患に対する治療も積極的に行っています。

産声を上げてから最後の時を迎えるまで、全ての段階で地域に求められる医療提供体制を、地域医療と先進医療の調和をもって整備し運用することが私たちの責務と考えています。そこには医療安全と人材育成が必要です。近隣病院との協力体制のもと人を育て、病院職員の連携をより一層強化し地域の「幸せ」のために尽くす、これが私たちの使命です。

本年の干支である「卯」は穏やかなうさぎの様子から安全、温和の意味があるそうです。厳しいコロナ禍を乗り越え、少しずつ穏やかな日々が訪れることを期待したいものです。

どうか本年もご支援を賜りますようお願い申し上げます。

良き医療人を育てる ～臨床実習に必要なOSCE試験と模擬患者について～

大学病院の役割の一つに、医学生・看護学生の教育があります。
島根大学病院でも、命の尊さと心身の痛みがわかる人間性豊かな医療人の育成に取り組んでいます。育成には患者さんのご理解とご協力が必要不可欠です。
今回は、臨床実習の前後で医学生の技能を評価するOSCE：オスキー（客観的臨床能力試験）と、それを支える模擬患者について紹介します。次世代を担う医療人の育成について、一緒に考えてみませんか?

臨床実習を行う医学生と看護学生はチーム医療の一員です！

臨床実習・PCC-OSCE専門部会　部会長
小児科教授
竹谷（たけ）　健（たにけし）

医学科4年生および看護学科3年生から始まる臨床実習は、医学部の中で最も長い実習です。どちらも医療現場で働く医療チームの一員として、実際の診療に参加し、指導医および指導教員のもとで医療の基本を学びます。特に、医学生は臨床実習を行う前に、臨床実習に必要な**態度・技能・知識・問題解決能力**を習得していることを確認するために、医師国家試験と同じ公的な2つの共用試験を受けています。知識・問題解決能力はコンピューターを用いる客観試験「CBT：シービーティー（Computer Based Testing）」で、態度・診察技能は「OSCE：オスキー（Objective Structured Clinical Examination＝客観的臨床能力試験）」で評価します。

実習を行う医療機関として、大学病院と地域病院での2つの実習を行います。大学病院では、高度医療を学ぶとともに、地域との連携、他職種の連携について理解を深めます。また、採血や超音波などの医療手技はスキルアップセンターでシミュレータを用いて習得します。地域病院では、島根県立中央病院に加えて出雲市内の診療所、島根県内の中山間地域・離島（隠岐の島）の地域医療機関などで実習を行います。特に、地域医療機関での実習ではプライマリ・ケアの現場も体験して、全人的な医療を学んでいます。さらに、海外実習も行うことで、国際的視野を備えた医療人の育成にも取り組んでいます。看護学生は病院実習以外に、保育施設、老健施設、保健所などでの実習にも取り組んでいます。

医学生も看護学生も約2年間の臨床実習を終了した後、国家試験に合格して、晴れて医師として看護師として皆さまに貢献させて頂きますが、臨床実習を行う医学生と看護学生も私たちの診療チームに参加し、その一員として診療業務を分担しながら、皆さまの診療に携わらせ頂きます。

ぜひとも、医学生に対して、厳しいご指導だけでなく温かいご支援を頂ければ幸いです。今後ともご協力ご教示のほど、重ねてお願い申し上げます。

医師法の改正と医学生の臨床実習

臨床実習前・後OSCEディレクター
クリニカルスキルアップセンター長
狩野（かりの）　賢二（けんじ）

昭和48年（1968年）より前は、医学部卒業後に1年以上、実地修練（インターン制度）として医行為が認められ、診療したのちに医師国家試験を受験していました。

しかし、インターンの身分や処遇が不安定であることなどの問題があったことから、昭和48年にインターン制度は廃止となり、また医師法第十七条で「医師でなければ医業をなしてはならない」と定められていたことから見学実習に偏っていました。令和3年5月に医師法の一部改正され、全国の医学生が共通の知識試験（CBT）および実技試験（臨床実習前OSCE）を受けて合格することで、臨床実習として一定条件下で基本的な医行為が認められることになりました。

そして、令和5年4月からCBTおよび臨床実習前OSCEが公的化試験になります。これに合格した医学生は、知識・技能・態度が一定水準以上あることが認められます。同時に、医学生の成績向上を目指すことで、優れた医療人育成が期待されます。さらに、令和7年4月からはCBT、臨床実習前OSCEおよび臨床実習後OSCEの三つに合格していることが国家試験の受験資格になります。

OSCE（客観的臨床能力試験）の目的と試験課題

■ 島根大学医学部医学科の卒前・卒後教育

CBT…Computer Based Testing

公的化試験になったOSCEは、診療参加型臨床実習に参加する医学生の技能を保証するものであり、一定条件下で基本的な医行為が認められることになります。したがって、臨床実習前OSCEは、医療手技の正確性だけでなく、医療者としての態度も評価の対象になっています。試験課題の「医療面接」は、あらかじめ設定されたシナリオを覚えている模擬患者さんに相手をして頂いて、試験時間10分の間で医療的情報を聞き出すだけでなく、視線を合わせ、適切な姿勢や態度で共感的コミュニケーションが行えるか評価します。医療手技の課題は、身体診察模擬患者さんの協力や医療シミュレータの利用によって、「頭頸部」、「腹部」、「神経」、「胸部」、「全身状態とバイタルサイン」、「基本的臨床手技」、「救急」、「四肢と脊柱」及び「感染対策」などの試験室を試験時間5分で順番に回って、患者さんに配慮した安全な医療手技ができるか評価します。

臨床実習後OSCEは、公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構（CATO）の課題と、全国の各大学医学部で作成した独自の課題の両方が、2020年4月から共用試験として正式に実施されました 。CATOの課題は、ある症候をもつ患者への医療面接、身体診察、指導医への報告を1試験室内で連続的に実施します。各大学医学部独自の課題は、臨床実習で習得した医療手技・技術を評価するために実施します。

これらの臨床実習後OSCEによって、臨床研修開始時に必要な能力を評価します。新医師臨床研修制度へ円滑で切れ目なく繋げることにより、卒前から卒後まで一貫した医師養成を目指します。

OSCEに欠かせない“模擬患者（SP）”について

模擬患者（SP）とは、あらかじめ設定されたシナリオに基づいて仮想の症状を訴える患者を演じる者のことをいいます。

SPはシナリオを演じるだけでなく、将来の医師を育てる教育者としての役割も担っています。島根大学SP研究会は現在約76名の医療面接模擬患者が在籍しており、主に医学科学生のOSCEで活躍しています。また月に1回勉強会を実施し、病気に対する知識や演技の質の向上を図っています。

模擬患者としておこなうこと

1. シナリオ覚えます

名前、年齢、職業、家族構成、症状
食欲、睡眠、酒、たばこ、アレルギー
希望すること（しないこと）
これまでの病気　など

2. 症状を理解し表現方法を考えます

症状、状態の程度によって
話す速度や声の出し方、
表情やジェスチャーなどを
工夫する

3. 設定された患者を演じ、患者・教育者としてコメントします

- 信頼できる医療者であったか
- 困っていることを聞いてくれたか
- いいところを気付かせる
- 改善すべき点についてコメントする

ＳＰは覚えたことをすべて言う必要はなく、医師（学生）が聞いた質問のみに答えます。

シナリオ練習のようす

医療面接練習

SP体験者からひとこと

「毎月開催されるSP研究会で、模擬患者としての役割や実際の進め方を教えていただき、回を追うごとに不安が楽しみに変わっていきました。」

「医学生さんの成長を見れる。それもSPの格別な喜びでもあると感じています。」

医学生からひとこと

「模擬患者さんとの医療面接の練習は試験本番の雰囲気を体験することができ、友達同士で練習するのとは全く異なりとても勉強になりました。」

「患者さんの立場に立った時、どんなことを感じるかを忘れずに学んでいけるよう頑張ります。」

クリニカルスキルアップセンターでは模擬患者さんを募集しています
くわしくは折り込みの案内をご参照ください

Professor ～どんな先生？～

島根大学病院に所属する教授の人柄、専門分野などを紹介するコーナーです。

医療安全管理部のミッション

医療安全管理部　深見（ふかみ）　達弥（たつや）

2022年8月より、医療安全管理部の教授を拝命しました深見達弥です。医療安全管理部の活動は大きく分けて二つあります。医療事故防止のための、医療における質の向上と、事故に対する対応です。医療安全管理部は両方を担当し、そのリーダーシップをとっていくのが私たちの役割です。医療安全管理部は多職種で構成されており病院の縮図といえ、多角的な意見や考え方が必要です。私が一番気をつけているのは、風通しのよさや相談しやすい雰囲気作りです。インシデント（患者さんの診療・ケアにおいて、本来あるべき姿からはずれた事態や行為のこと）レポートを読んでいるだけでは把握できないことはたくさんあります。

最前列向かって左から2番目が深見教授

電話でもメールでもいいので、なんでも相談してもらえたらと思っています。些細なことであっても、そこに患者さんの安全性や、医療における質向上につながるヒントがあると考え、日々の病院機能を支える活動を行っています。

白血病発症機構の解明を目指して

写真左端が宮城教授

生化学講座（代謝生化学）　宮城（みやぎ）　聡（さとる）

2022年7月より、医学部生化学講座（代謝生化学）の教授を拝命致しました宮城と申します。

私達の体内の各臓器には幹細胞と呼ばれる細胞が存在しています。幹細胞は、胎児発生期の臓器の形成、成人における機能維持、そして損傷後の臓器修復に働く重要な細胞です。また、近年の研究から、遺伝子変異等による幹細胞の機能異常が、癌などの病気の原因となることが明らかにされつつあります。私達は、すべての血液細胞を生み出す能力を持つ血液幹細胞をモデルとして研究を行っております。特に、その制御にどのような遺伝子が関与し、その遺伝子異常がどのように白血病を引き起こすのか？に興味を持っています。この出雲の地から、臨床に繋がる研究成果を発信できるよう努力してまいりますので、ご指導ご支援賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

ボランティアさんのひとこと　「笑顔と思いやりの心」

病院ボランティア　澄田　隆さんより

患者さんからの「ありがとう」「助かりました」の声に励まされ、定年退職の翌日から始めた病院玄関ホールでのボランティアも早いもので8年目となりました。患者さんは体調が思わしくない中、不安を感じながら来院されているかと思います。そのような気持ちに寄り添い、自動再来受付機の使い方や診療科の場所が分からないといったストレスが少しでも和らげばとの思いで日々活動しています。何かお困りのことがあったときは、お気軽に声をかけてくださいね。

うぐいす色のエプロンや
みどり色のジャンパーが目印です☆

私のここだけの話

「家庭菜園での事件簿」

内分泌代謝内科
講師　守田（もりた）　美和（みわ）

数年前に家庭菜園を始めました。料理が得意ではない私も（下手ではなくて、やる気になればできる、はず）、料理を楽しんでいます（生か焼くだけ料理）。昨年、うちの畑で起きた事件を聞いてください。ゴーヤの苗を買いました。「○○ゴーヤ」と名前あり珍しい種類かなと思っていると、ゴーヤにしては明らかに大きな葉が（①）。カンの良い方は気がつくと思うのですが、私は「珍しいゴーヤ」だと思い込んでいるので、すごい、と思いながらも、支柱をして茎を上へ上へと伸ばしました。が、しかし違ったのです。その大きな葉はなんとカボチャ！だったのです。私が買ったのはゴーヤの苗ですよ。混乱しつつ、よく見ると（②）、大きな葉っぱに隠れ、ゴーヤの葉も！2種類育つなんてラッキーと、両方育てましたが、カボチャの繁殖力の強いこと強いこと。ぐんぐん広がり畑の半分以上に（③）。教訓を生かし、今年は種からゴーヤを育て、沢山ゴーヤチャンプルを食べました！美味しいゴーヤレシピをご存じの方は教えてください(^^)。ちょっとくらい難しくても大丈夫ですよ。きっと本気を出せば私にも作れるはずですから！

①

②

③

病院紹介①

リハビリテーション部

部長　馬庭（まにわ）　壮吉（そうきち）
療法士長　江草（えぐさ）　典政（のりまさ）

“リハビリテーション”は怪我や病気によって日常生活や社会生活に困難を生じた患者さんが、おひとりおひとりの「こうありたい」を実現していく過程を指す言葉です。歩けるようになりたい、食事を作りたい、仕事に戻りたい、人と会話したい、食事が食べられるようになりたいなど、生活のあらゆる側面での皆さんの目標を達成するためのプロフェッショナルが当部に在籍しています。

また運動療法の支援機器、日常生活動作練習用のシミュレーターを備えるなど環境も充実しています。

発症（手術）直後から退院まで、皆さんの希望を最大限叶えられるように伴走したいと思います。リハビリが始まったら、ぜひ皆さんの「目標」「希望」を教えて下さい。

病院紹介②

がん患者・家族サポートセンター
（がん相談支援センター）

センター長　田村（たむら）　研治（けんじ）
副センター長　今岡（いまおか）　佐織（さおり）

がん患者・家族サポートセンターでは、がん専門相談員が信頼できる情報に基づき、治療や療養生活に伴う疑問や不安など様々な相談に応じています。患者さんやご家族、地域のみなさまにも無料でご利用いただけます。

がんの診断を受けられると「何を相談したらいいのかわからないけど、不安」「ショックで先生の話が入らなくて」「医療費いくらかかるの?」「仕事のことどうしよう」「ひとり暮らし。副作用で家事ができない」「ゲノム医療って?」「がんは遺伝するの?」など相談は様々です。相談員と話をすることで解決できたり気持ちが軽くなることもあります。相談内容によって、医師や看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、管理栄養士、遺伝カウンセラー等専門のスタッフ、院外関係機関とも連携を図ります。ぜひお気軽にご利用ください。

島大病院　ちょっと気になる健康講座　放送予定（出雲ケーブルビジョン）

2023年1月
放送予定

耳鼻咽喉科・頭頸部外科　教授　坂本達則
放送内容：「人工内耳について（仮）」

しまだい病院の キラ☆めき！

島根大学病院でキラキラ輝きながら、めきめきと実力をつけている若手医療職員を紹介します。
皆様に信頼される医療を提供するため、今日も笑顔で、真剣に仕事に取り組んでいます。

卒後臨床研修センター　初期研修医　三谷（みたに）　一貴（かずたか）

医科研修医2年目の三谷一貴と申します。この2年間で指導医の先生をはじめ、看護師さんや医療クラークさんなど多くの方々に支えてもらいながら研修に励むことができました。来年からは島根大学泌尿器科専攻医として島根の医療に貢献し、このご恩を還元できるよう努めていきたいと思います。まだまだ知識や経験の足りない部分もあると思いますが、患者様一人一人と真摯に向き合っていきますのでどうぞよろしくお願い致します。

集中治療部　看護師　小村（おむら）　まみ

看護師として働き始めて2年目となりました。私が働く集中治療部は、大手術後、重症緊急入院、重症外傷など様々な患者さんの受け入れを行っています。重症患者さんへの看護は緊張や不安の連続ですが、身体の回復や自分らしさを取り戻していく場面など患者さんの一歩の前進を感じた時、やりがいや嬉しさを感じます。大変な治療の中にあっても患者さんが少しでも安心できる関わりができる看護師を目指したいです。

リハビリテーション部　言語聴覚士　伊藤（いとう）　希実（きみ）

社会人1年目から入職してあと数年で20年を迎えようとしています。入職した頃は、まさか自分が5人の子育てを含む母業とフルタイム勤務に奔走する毎日は予想していませんでしたが…★休む時は全力で★母の代わりはいないと…いつも背中を押してくれる同僚に恵まれ、ドタバタながらも幸せに勤務しています。育児休業中に始めたパン作りも6年目になりました。忙しいからこそ敢えて自分の時間を確保して、毎日を楽しみます！

編集後記

あけましておめでとうございます。大学病院の役割のひとつに、“医学生を良い医師に育てる”ことがあります。

OSCE（オスキー）も公的化となり、今後もますます模擬患者さんの協力が必要になっています。ご興味のある方はぜひ、ご協力をお願いいたします。

今回のインタビュー中、なんとある先生が手相を見られるということでドキドキしながらみてもらいました。すると、生命線が二重にあるから心配ない！と太鼓判を押していただき、単純ながら嬉しくなりました。

油断は大敵ですが、過度に不安になることなく日々笑いを交えながら、免疫力を高めて山陰の冬を乗り越えていきましょう。

本年も皆様の健康に役立つ情報が発信できるよう努めます。

どうぞよろしくお願いいたします。

【編集者より】

島根大学医学部附属病院広報誌
しろうさぎ
についてのお問い合わせ先
（このＱＲコードで携帯から島根大学病院ホームページが見られます↑）

医学部総務課　企画調査係　広報担当
☎0853-20-2018
✉mga-kikaku@office.shimane-u.ac.jp
https://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/